日本語学習者のストーリーテリングに関する一分析
話の展開と接続形式を中心にして

栃木　由香

要　　旨

6枚の絵を見て、話の内容を日本語で説明する、という課題を達成するために、日本語学習者たちは、既習の知識を生かしてどのように話を展開していったか。本論文は、筑波大学留学生教育センターで行ったストーリーテリングの録音資料に対し、話の展開にともなう接続形式の使用の特徴と問題点を中心とした分析を試みたものである。

〔キーワード〕　ストーリーテリング、接続形式、ストラテジー、

1．はじめに

日本語学習者の発話は学習が進むにつれて、より多く語彙や表現を駆使して、さまざまな機能を果せるようになることが期待されるが、そのためにはいくつかのコトが結びついた複雑な構文の使用も必要になってくる。

本論文の目的は、日本語学習者の発話中の、接続形式の使用に関する特徴や問題点を明らかにすることであり、その1つの分析対象として絵で与えられたストーリーの言語化を課題としたストーリーテリングを選んだものである。このストーリーの言語化という課題は、一般のコミュニケーションとはかなり状況が異なるが、話の展開に伴ってコトとコトがどのように結びつけられているかを見るのには興味深いものであると思う。

なお、ここでいう「コト」とは寺村秀夫1982の用語（もともとは三上章の用語）に従ったものであり、氏の説明を引用すれば、「外界の様子、ものや人の状態や変化、働きを表わす『述語』と、その述語を中心として描かれる事象や心象に登場する人、物、概念などを表わす『補語』から成る」もので文の中の「話し手が客観的に世界の事象、心象を描こうとする部分」ということになる。寺村氏はこれを「文→コト＋ムード」という分析のために用いたのであるが、ここでは展開していく話の中の1つのできごとを叙述するもの、構文分析上の一単位として用いることにする。

2．分析の資料

2－1．対象者

本論文が分析の対象とする資料は、筑波大学留学生教育センターが文部省研究留学生の予備教育のために設けている6か月間（約500時間）の日本語コースの、1989年前期コース最終テストの中

で行われた、ストーリーテリングの録音テープ19人分である。彼らは全員男性で、年齢は22～33歳。国籍はアジアの非漢字圏、中南米を中心にさまざまである。分析にあたっては便宜上、彼らにＦ１～Ｆ19という番号をつける。

この予備教育コースの受講者は、来日直後、日本語がほとんどゼロの状態で受講を開始する場合が多いが、中には来日前に国の大学等で学習し、コース受講前にすでに日常会話をこなせる程度のレベルに達している者もいる。今回の場合、19人が３つのレベル（クラスの数は４つ）に分けて授業が行われていたので、それぞれにＡ・Ｂ・Ｃというグループ名をつけておく。各グループの受講開始時のおおよそのレベルとそれぞれに属する受講者の番号は次の通りである。

Ａ：（Ｆ１～Ｆ２）

コース開始時にすでに日本語で日常会話ができるレベルに達していた。

Ｂ：（Ｆ３～Ｆ６）

来日前に150 ～500 時間程度の日本語学習歴があり、ある程度日本語について知っていた。

Ｃ：（Ｆ７～Ｆ19）

来日前の日本語学習歴がゼロであった受講者中心。

（学習歴はあったもののＡ・Ｂのレベルについていけなかった者数名を含む。）

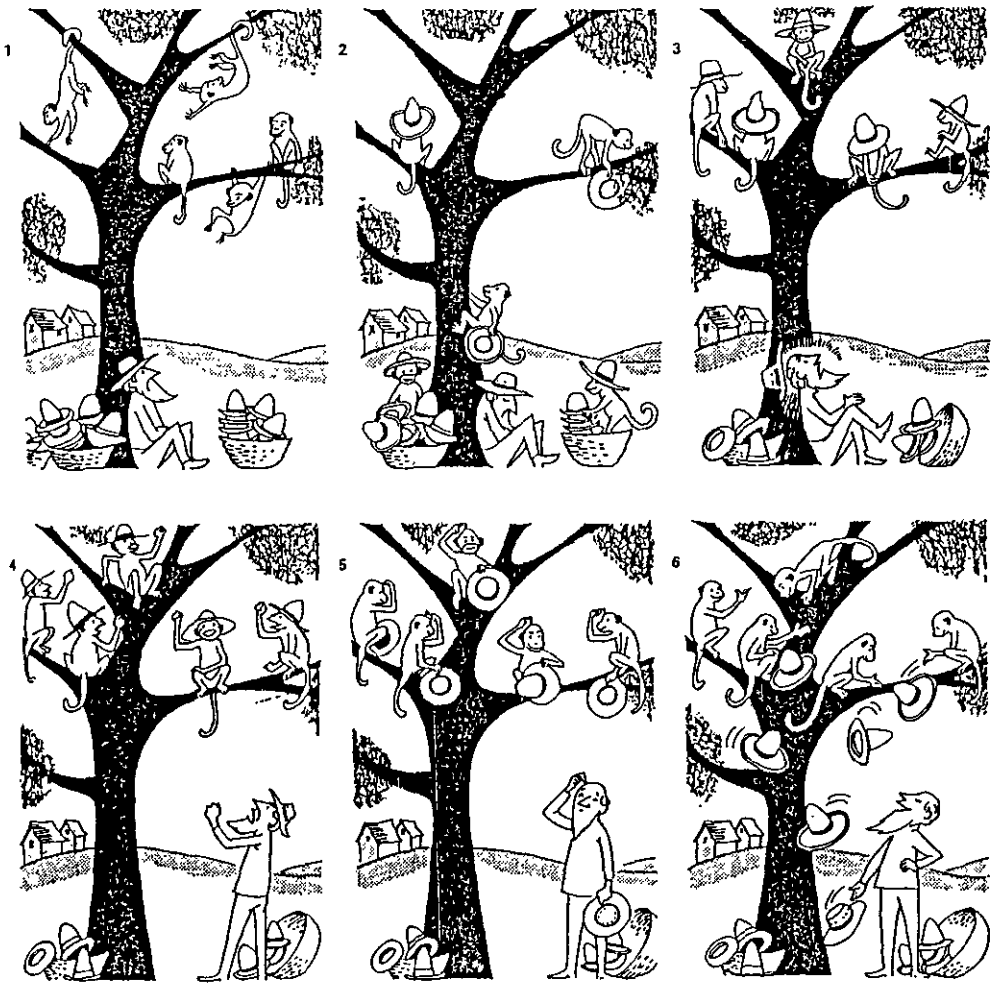
また、本論文では以上の日本語学習者の資料と比較対照を行うために、母語話者資料として日本人９人にも同じストーリーテリングをしてもらい、それを録音したので、これをＪ１～Ｊ９と表す。彼らの年齢は25歳～40代後半で、性別の内訳は男性４人・女性５人。コントロールされた、いわゆる「先生ことば」を避けるため、日本語教師からの録音は最小限（１人分）にとどめた。

２－２．資料の採取方法

すでに述べたように、日本語学習者の資料は、コースの最終テストにおいて録音されたものである。このテストの方法は、６コマのつづき絵（次頁に示すものの拡大版）を見せ、そのストーリーを試験官に対して説明させるというものであり、その際、絵とともに、ストーリーの展開に関係した６単語（絵の下に示す）も英訳つきで被験者に示された。その他、被験者の質問に応じて、試験官が語彙等を教える場面も２・３あったが、基本的には試験官は助け船を出さず、被験者ひとりに説明させる形をとった。

一方日本人は、資料採取の趣旨を説明した上で録音に協力してもらったので、ひとりひとり採取場所も状況も違ったが、絵を見て説明するという手順は同じで、日本語学習者の場合とは単語が与えられない点が異なった。

この課題に用いた絵は次の６枚で、"Composition Though Pictures" J. B.Heaton,Longman 1966からのコピーである。



[語彙]	monkey	さる
	hat	ぼうし
	to put (one's hat) on	(ぼうしを) かぶる
	to take (one's hat) off	(ぼうしを) とる
	to throw	すてる
	to mimic	まねる

3．母語話者資料の分析

3－1．文の数とコトの数

前頁の絵によって提示されたストーリーは、どのように言語化され、話の展開の過程ではどのような接続形式が用いられたか。日本語学習者の資料の分析の前に、本章では日本語の母語話者である日本人の資料についての分析を行う。

同じ絵を見てのストーリーテリングとはいえ、内容のとらえ方、話の進め方や言葉の使い方などは人によって差がある。しかし、ここではそれを承知で、あえてこのストーリーを母語話者が言語化する時の共通した特徴というようなものをさぐってみたい。

まず、母語話者のひとりＪ２のテキストを例にとってみよう。

［テキストＪ２（女　40　会社員）－①］

帽子売りがこかげで休んでいました。すると、こっくりこっくり眠くなってしまいました。木の上にいた、おサルさんが、ね、帽子売りが、眠っている、えー、うちに、帽子を取って、木の上に、行ってしまいました。帽子売りが、目を、目をさましてみると、あれっ…んー、サルが、木の上にみんなのっかって、ぼ、帽子売りの帽子を取って、のって行ってしまいました。「こら、帽子を僕の帽子を返せ。」すると、おサルもまねをして同じことをします。帽子売りが「こまったなあ」と帽子を取ってみると、ぼう、おサルさんも帽子を取りました。「あ、そうか。」帽子売りはパッと、帽子を投げました。すると、おサルさんも、同じように、帽子をポンッと、離しました。

上のテキストは、音声資料を文字化して句読点をつけたものである。ここで読点は意味的なくぎりではなく発話中の短いポーズを示しており、句点は言語形式やイントネーションから、発話のひとくぎり（これをここでは文と呼ぶ）と解釈できる部分に用いている。また、文と文の間以外での長めのポーズは、「…」という記号を用いて記す。しかし、本論文では発話中のいいよどみやフィラー、単語の繰返しなどを「発話がいかにスムーズに流れたか」というような評価の観点から取り扱うことはしないので、途中に長いポーズが入っても、そこで発話が中断してしまわない限り１文としてみる。

では次に、先のテキストがいくつの文、いくつのコトによって成り立っているかをみるために、１文ごとに番号をつけ、さらにコトの単位で段を変えて記述してみる。

［テキストＪ２－②］

1　帽子売りがこけげで休んでいました。

2　すると、こっくりこっくり眠くなってしまいました。

3　木の上にいた、おサルさんが、ね、帽子売りが、眠っている、えー、うちに、
　　帽子を取って、

木の上に、行ってしまいました。

4　帽子売りが、目を、目をさましてみると、
あれっ…んー、サルが、木の上にみんなのっかって、
ぼ、帽子売りの帽子を取って、
のって行ってしまいました。

○　「こら、帽子を僕の帽子を返せ。」

5　すると、おサルもまねをして
同じことをします。

6　帽子売りが「こまったなあ」と帽子を取ってみると、
ぼう、おサルさんも帽子を取りました。

○　「あ、そうか。」

7　帽子売りはパッと、帽子を投げました。

8　すると、おサルさんも、同じように、帽子をポンッと、離しました。

ここで下線を付したのは、連体修飾節としてコトの中に入りこんでいるコトである。また、登場人物のセリフについては、7のようにセリフがコトの中に入りこんでいる場合はコトの一要素とみなし、セリフ自体が独立している場合は、○という記号をつけ、文とは区別した。このような数え方でいくと、テキストＦ２は、８文＋セリフ２で成り立っており、文中には１６のコトがあるということになる。そして単純に計算すれば、１文は平均２つのコトから成っているということにもなる。

同様にして、Ｊ１～Ｊ９すべての資料についても文の数、独立したセリフの数（これは文の数には含めない）およびコトの数を数えて表にしたものが、次の表１である。

表１

	Ｊ１	Ｊ２	Ｊ３	Ｊ４	Ｊ５	Ｊ６	Ｊ７	Ｊ８	Ｊ９
文の数 独立セリフ	１１ (0)	8 (2)	１２ (3)	9 (0)	１０ (1)	１２ (2)	9 (0)	１１ (2)	7 (0)
コトの数	２４	１６	２９	２０	１７	２２	１６	２２	２０
コトの数／文	2.18	2.00	2.42	2.22	1.70	1.83	1.78	2.00	2.88

この表の最下段、「コトの数／文」とは、コトの数を文の数で割った数値で、１文中の平均コト数を表している。先に引用したＪ２のテキストからもわかるように、日本人の発話の中にも、単文もあれば、いくつものコトが連なって１文を成している文もある。よって、この平均値がそのままコトの数と、文の数の相対関係を示しているわけではない。しかし、この数値が理論上１未満には

なり得ず、文の数とコトの数が近いほど１に近づく（すべての文が連体修飾節なしの単文の場合は１になる）ということを考えれば、１つの目安にはなるであろう。ちなみに、ここでＪ１～Ｊ９の１文中の平均コト数は1.70から2.88となっている。

３－２．話の展開と接続形式

では次に、絵によって提示されたストーリーと各自のテキストは、どのように対応しているのか、そしてテキスト中のコトとコトは、どのように結びつけられているのかを見ていこう。

このストーリーの登場人物（と動物）は、１人の男（帽子売りのおじいさん）と５匹のサルたちである。（ここでは前者を「男」、後者を「サル」と単純化して呼ぶ。）

ストーリーの内容は、簡単に言ってしまえば、「男が、寝ている間にサルに帽子を取られてしまったが、最後にそれをうまく取り戻した」というものだが、この過程における男とサル、両者の行動の相互関係（特にサルが男の行動をまねるということ）が、ストーリー展開上の重要な要素になっている。

では、まずそれぞれの絵に描かれている男とサルの行動をできるだけシンプルな形で書き出してみよう。絵の番号は、Ⅰ、Ⅱのようにローマ数字で表す。

	≪男≫	≪サル≫
絵Ⅰ	木の下にいる	木の上にいる
Ⅱ	眠る	帽子を取って木の上にもって行く
Ⅲ	目をさます	帽子をかぶって木の上にいる
Ⅳ	怒って手を上げる	男の動作をまねる（手を上げる）
Ⅴ	困って帽子を取り頭をかく	男の動作をまねる（帽子を取り頭をかく）
Ⅵ	帽子を捨てる	男の動作をまねる（帽子を捨てる）

この中で、絵Ⅰは行動と言うよりもはじめの状況設定であり、実際のストーリー展開は絵Ⅱから始まる。また、行動ではないが、Ⅵの行動の後には「男が帽子を取り戻す」というストーリーの結末がある。

さて、このストーリーを言語化して、ひと続きの話として話すためには、上に書き出した項目を、その相互関係に従って１列に並べなければならない。以下は、母語話者資料に多くみられた並べ方の例である。

はじめの状況設定　Ⅰ．a：木の下に男がいる

Ⅰ．b：木の上にサルがいる

話の展開　Ⅱ．a：男が眠る

Ⅱ．b：サルが男の帽子を取る

Ⅲ．a：男が目をさます

Ⅲ．b：男が状況の変化（サルが帽子をかぶって木の上にいる）を発見する

Ⅳ．a：男が怒る（手を上げる）

Ⅳ．b：サルが男の動作をまねる（手を上げる）

Ⅴ．a：男が困る（帽子を取って頭をかく）

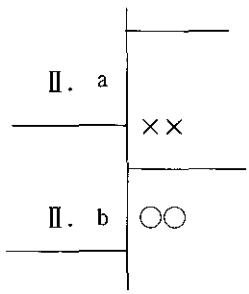
Ⅴ．b：サルが男をまねる（帽子を取って頭をかく）

Ⅵ．a：男が帽子を捨てる

Ⅵ．b：サルが男をまねる（帽子を捨てる）

結末　Ⅵ．c：男が帽子を取り戻す

これら13項目のことがらは、Ｊ１～Ｊ９すべての話で取り上げられ、この順番に並んでいるとは限らないが、ここでは［Ⅰ．a］から［Ⅵ．c］までの連続を基準として、それらの間に使われた接続の形式をみていく。なお、順番が違ったり抜けていたりしている場合は「××」、逆に上記のことがらの間に別のことがらが入り込んでいる場合は「○○」という記号で示すことにする。つまり、



とあれば、ここでは［Ⅱ．a］の次に［Ⅱ．b］は来ておらず、代りに何か別のことがらが入っているということを意味する。なお接続形式とは少々異なるが、話の展開に関係のある副詞は文頭のものに限り、「▲」という記号つきで記した。また、表中の空欄は、前の項目と後の項目（それぞれを表すコト）が、間に接続形式を介せずに並んでいるということを表わす。

表2

	J1	J2	J3	J4	J5	J6	J7	J8	J9
Ⅰ. a		××	そして	～と		○○	そして	××	××
Ⅰ. b	▲おもわず	すると	そのうちに	ところが		～ているうちに		○○～て	それで
Ⅱ. a	～たら	～ているうちに	すると	そのあいだに	～と	すると	～ているあいだに	～んで	～てる間にですね
Ⅱ. b	で、			▲ふと				～んで	××
Ⅲ. a	～たら	～と	～と	～と		～と	～たら	～た時に	××
Ⅲ. b	～ということで							～し	それで
Ⅳ. a		すると	すると	～と	～が	そうすると			～と
Ⅳ. b	で、						××	○○で、	で、
Ⅴ. a	そうすると	～と	～と	～と	～と	すると	××	で、	～ても
Ⅴ. b	で、	○○	○○	そこで	そこで	そこで		で、	そいで
Ⅵ. a	そうすると	すると	すると	そうすると		そうしましたら	そうすると		～たらですね
Ⅵ. b	～て	××			で、	～て	そうやって	で、	～ということで
Ⅵ. c									

表2を横に見てみると、次のような特徴が見られる。

①［Ⅰ. a］と［Ⅰ. b］、［Ⅱ. b］と［Ⅲ. a］、［Ⅲ. b］と［Ⅳ. a］、［Ⅳ. b］と［Ⅴ. a］の間は比較的、接続形式が少ない。

――→最初の1組は話のはじめの状況説明で、2つのことがらは並列しているにすぎないので、特にその関係は示される必要がない。

あとの3組は絵が変わる部分にあたり、時間の経過や順次的な動作については特に接続形式を使わずに話している人が多い。

②［Ⅱ. a］と［Ⅱ. b］の間には、同時性または継起性を表す形式が多い。

――→「男が眠る」「サルが男の帽子を取る」という2つのことがらについて、前者を状態として静的にとらえた人は「～ている間に」「～ているうちに」のように同時性を示す形で、

（状態の）変化として動的にとらえた人は「すると」「～と」「～たら」のように継起性を示す形でコトとコトの関係を表わしている。

③［Ⅲ．a］と［Ⅲ．b］の間には「～と」「～たら」が多い。
――→ここで使われているのは、いわゆる「発見の『と』」（豊田豊子1976「前項である状況が述べられ、後項であるもの、ことの状態が述べられて発見の意味になる文の前項と後項を結ぶもので、この場合『と』は発見の展開点の役割をする。」）であり、これは「～たら」を使って言いかえることもできる。

④［Ⅳ］［Ⅴ］［Ⅵ］それぞれの［a］と［b］の間には「～と」「すると」が多い。
――→この「～と」は　の「～と」とは異なり、2つのできごとの継起性を表すものである。［Ⅳ］～［Ⅵ］の話の内容は、「男の動作をサルがまねる」ということの繰返しであるから、その内部で対になっている［a］と［b］の結びつきは深い。

⑤［Ⅴ．b］と［Ⅵ．a］の間には、接続詞「そこで」の類が多い。
――→この話の中の男は「サルが自分のまねをする」ということを利用して、帽子を取り戻したのであるから、「帽子を取る」という動作は［Ⅳ］［Ⅴ］でのできごとを受けての意図的な動作である。よって、この「そこで」は［Ⅴ．b］と［Ⅵ．a］を結んでいるというよりも、［Ⅳ］［Ⅴ］と［Ⅵ．a］を結んでいるのではないかと思う。

4．日本語学習者資料の分析

4－1．文の数とコトの数

まず、母語話者の場合と同様にして、日本語学習者のテキストの文の数とコトの数を表にしてみる。なお、F13は話の途中でギブアップしてしまったので、ここでは数に入れない。

表3

クラスレベル	F1 A	F2 A	F3 B	F4 B	F5 B	F6 B	F7 C	F8 C	F9 C	F10 C	F11 C
文の数 独立セリフ	14 (0)	12 (0)	13 (0)	19 (3)	12 (0)	10 (0)	13 (0)	12 (0)	18 (0)	15 (0)	20 (2)
コトの数	28	22	22	26	16	17	18	17	28	19	22
コトの数／文	2.00	1.83	1.69	1.37	1.33	1.70	1.38	1.42	1.56	1.27	1.10

クラスレベル	F 12 C	F 14 C	F 15 C	F 16 C	F 17 C	F 18 C	F 19 C
文の数 独立セリフ	14 (0)	14 (0)	13 (0)	13 (0)	11 (0)	10 (0)	10 (0)
コトの数	14	17	18	17	13	17	15
コトの数／文	1.00	1.21	1.38	1.31	1.18	1.70	1.50

この表を見ると、母語話者の場合1.70～2.88だった１文中の平均コト数が、日本語学習者の場合、全体的に低いということ、特にクラスレベルＣ、つまり６か月コースの受講開始時に日本語がほとんどゼロであった学習者の中の何名かの数値はほとんど１に近いということがわかる。彼らが、どのようにして話を進めているのか、例として特に１文中の平均コト数が１に近かったＦ12とＦ11のテキストを見てみる。

［テキストＦ12］
サルたちは、木うえに、あす、遊びます。男の人、ろじんです。木のところで、すわって、います。たくさん、帽子、あります。老人は、寝ました。サルは、帽子を、取った。サルは、帽子を、かぶりました。老人は起きました。見ました。老人は、サルを、帽子を、か、かぶ、かぶって、います。老人は、おこるになりました。サルは、サルは、老人を、まわりました。老人は、はらいました。サル、サルは、帽子を、捨てました。

このＦ12のテキストは文のすべてが単文で、しかも接続詞もない。つまりコトとコトの間の関係は一度も明示的に示されていないのである。ここであえて明示的にと言ったのは、「男の人、ろじんです。木のところで、すわっています。」という、連続した２つの単文の間にみられる共通した主語の省略も、２つのコトを結びつけるひとつの方法であり、Ｆ12のテキスト中のコトには１つもつながりがない、とは言えないからである。しかし、同じく共通した主語の省略がある場合でも、「老人は起きました。見ました。」では、２つのコトの間のつながりをなんらかの接続形式を用いて示さない限り、その間のつながりは見えてこない。このように、明示的な関係表示が必要な部分にも接続形式を用いていないＦ12のテキストは、意味の上でもコトの羅列に近く、文章にはなっていないと言えるのではないだろうか。

［テキストＦ11］
むかしむかし、むかしむかし、私のおばあしゃんは、小さいのまち、村、住んでいました。それで、ひは、にしは、彼はたくさん帽子は持っていました。あとで、これは木？木の、木の下は、下、木の下、彼はすわっていました。あそこで、はん、はん、20分ぐらい前に、昼ごはんを食べました。

それで、眠いになりました。それで、ねむってきめました。あそこで、あとでたくさんサルはあげて、さげて、あげて、さげて、あとで、サル、サルは帽子をもって、持っていってきました。この帽子は、かぶ、かぶんでいました。それで、おばあしゃんは２時間、２時間、２時間後、２時間後おしました。「え！どこに私の帽子がありますか。」聞きました。それで、彼はさがしていました。びっくりしました。びっくり、びっくりしたときい、サルは帽子とかぶんでいました。あそこで、「どうやってこの私の帽子はかいましたか。かえってほしいんですか。」それで、どうやてわからないです、わからなかった。私のおばあしゃんは20分ぐらい考えました。それで、意見、いい意見は出しました。それで、「ああ、わかった。まめる、まめるかったはいいですか。」それで、はじめて顔、顔とか、髪の毛とか、少し髪の毛持っていました。それで、それで、サルは同じ、同じ、おばあしゃんは、おばあしゃんは、と、サルと同じ、同じ、やめました、同じことはやめました。それで帽子、帽子、帽子をかぶった、帽子をかぶんだ、かぶんだ。あとで、帽子をとらんだ、あとで、帽子を捨てる。それで、全部の、全部のサル、この帽子はかえりました。

Ｆ11のテキストも、22文中20文が単文であるが、Ｆ12との違いは文頭の接続詞が非常に多いということである。しかし、テキストを一読すればわかるように、そのほとんどは「それで」「あとで」「あそこで」の３つであり、意味的にそぐわないところにまで使われている。これはコミュニケーションストラテジーの一種、overgeneralization（過剰般化）であると思われ、文と文が形式上つながっていても、コトとコトの相互関係が示された文章にはなっておらず、やはりコトの羅列に近いと言えよう。

コトとコトの関係は、接続詞を用いて２つの文にしても、その他の接続形式を用いて１文で言っても、同じ意味を表すことができる場合が多い。そういった意味では、１文中の平均コト数がそのまま発話者の伝達能力レベルを表すことにはならない。しかし、初級～中級程度の日本語学習者については、接続形式を知らないか、または知っていても使いこなせないために発話が単文の羅列になってしまうケースが多く、文の数とコトの数の割合は、発話能力を測る上での１つの目安になるのではないかと思う。

4－2．話の展開と接続形式

次に、F１～F19のテキストに使われた接続形式を、３－２でＪ１～Ｊ９について行なったのと同じ方法で表にしてみよう。

表４－１

	F１	F２	F３	F４	F５	F６	F７	F８	F９	F10
Ⅰ．a	～て		けど、しかし		～ている時				この時は	
Ⅰ．b	○○その時		××	○○～から		○○～ので	▲あとで	○○～て		▲あとで
Ⅱ．a	だから	～て			～る時	それから	▲あとで		この時	
Ⅱ．b				▲あとで	そして	▲あとで		あと	１時間あと	
Ⅲ．a	～た時	～たら	～たら			～たあと	～る時	～たら	～た時	
Ⅲ．b	××				ですから	そのあと	▲あとで	××	××	？？
Ⅳ．a	××		～て、けど	～と		××	でも	××	××	？？
Ⅳ．b	○○だから	＊意味不明	××	▲あとで	はじめに	○○それから	○○▲あとで	○○だから	？？	？？
Ⅴ．a	～て、だから		××	～て	～て	××	～たら	～た	？？	？？
Ⅴ．b	○○	それから	○○	○○▲いま	そして	××	▲あとで	それから	▲あとで	▲あと
Ⅵ．a	～て	～て	～て	▲もちろん		～ながら		～て		
Ⅵ．b	だから	～て	それから	だから	ですから	××	××	だから	だから	▲あと
Ⅵ．c										

この表４は、「××」や「○○」が多いこともあり、横並びに共通して現れた特徴がつかみにくいが、前章で母語話者資料にみられた特徴がここではどのようになっているのか、例文もまじえて見ていきたい。

①［Ⅰ．a］と［Ⅰ．b］の間：母語話者の場合と同様に全体的に接続形式が少い。

絵［Ⅱ］と［Ⅲ］、［Ⅲ］と［Ⅳ］、［Ⅳ］と［Ⅴ］の間：ここも全体的に見れば接続形式の使用がやや少ないが、副詞「あとで」の使用が目立つ。

表4－2

	F11	F12	F13	F14	F15	F16	F17	F18	F19
Ⅰ．a	××		××				××		
Ⅰ．b	○○ それで		××		○○ ～から		○○		
Ⅱ．a	あそこで あとで		それ から		でも	～い時		～た あとで	
Ⅱ．b	それで		××		～です から	その あとで			
Ⅲ．a	それで		××	～て	～て			～る時	
Ⅲ．b	あそこで		××	ここで	？？		～て	○○ ～から	
Ⅳ．a	××		××	××	？？	～る時	そして		
Ⅳ．b	それで	××	××	ここで	××	○○	××		
Ⅴ．a	それで	××	××		○○ だから		××	～ている 時	
Ⅴ．b	▲あとで	？？	××	××	だから	～ので		××	
Ⅵ．a	それで		××	～て あとで	そして	～てます から	だから	それ あとで	～て
Ⅵ．b	？？	××	××	××	～て	××		××	××
Ⅵ．c									

例1　サルは帽子を取って木、木に帽子をかぶります。「ああ、おもしろいおもちゃだ」と思います。あとで男の人は起きます。（F4）

例2　それから、木からサラは、サラは、帽子をこの人の帽子をかぶった、かぶって、木の上に遊びました。あとで、たびのものは起きた。（F6）

例3　この人は起きる時、びっくりしました。たくさん、ぼ、帽子、帽子を、なくしました。あとで、この人は、サルが、に、帽子を、頼みました。（F7）

この「あとで」は本来、「～たあとで」「そのあとで」のような形にならなければ接続形式としては使えないのだが、接続詞の代わりにこれを文頭に用いている例が多い。表を見るとF7は、絵が変わる部分に、5回中4回この「あとで」を用いているが、これは場面の変化や時間の経過をこの形でしか表現できなかったためはないかと思う。

②［Ⅱ．a］と［Ⅱ．b］の間：同時性を表そうとした（と思われる）人は「～時」、継起性を表そうとした（と思われる）人は「それから」「あとで」などを使っている。

例4　彼は、彼は眠る時、サルたちはあの人の帽子を取って、帽子をかぶります。（F 5）

例5　セイジン、セイジンは眠い時、サル、サ、サルを帽子を取ります。（F 16）

例6　鈴木さんはゆっくり寝ていました。この時、サルは、はしを取って、木の上、上、上にいました。あとは、はい、帽子をかぶりました。（F 9）

例7　この人は、疲れたので、すぐ寝ました。それから、木からサラは、サラは、帽子をこの人の帽子をかぶった、かぶって、木の上に遊びました。（F 6）

例8　この人は寝たあとで、サル？サルは、木から、さし、さぎました？さぎて帽子を取って、木に、あげた、あげた、あげました。（F 18）

③［Ⅲ．a］と［Ⅲ．b］の間：「～たら」「～時」「～て」などが使われた。

例9　起きたら、おじいさんがすごく、びっくりしました。（F 2）

例10　ヤマガタさんは、おき、起きたら、きょうに、自分の、帽子を、見ました。（F 3）

例11　1時間あと、鈴木さんは起きました。起きた時、帽子がない時、上に見た。たくさん、ぼ、帽子、帽子を、なくしました。（F 7）

例12　この人は、起きた時、目を、目をさめた時、ちょっとびっくりしました。どうして、自分の帽子はサルたちにとられてしまった。（F 1）

例13　でも、サルは、サルは、帽子を、帽子を、どろぼうの人ですから、男の子は、お、おきまし、おき、くて、おきくて、びっくりしました。彼は、サル、サル、サルに帽子を、か、かばる、見ました。（F 15）

この中で、例9、12、13のように、発見というよりも「びっくりした」という、男の驚きを述べている場合、「～たら」「～時」「～て」による接続はいずれも可能である。（上の例では文法上の間違いから非文になっているが。）しかし、実際には「男が起きた→びっくりした」という2つのコトをつなげてしまうと、そのあとに「びっくりした」理由がうまく続けられない、ということになりやすい。

④［Ⅳ］［Ⅴ］［Ⅵ］の［a］と［b］の間：さまざまな形が使われているが、［Ⅳ．a］と［Ⅵ．b］の間には「～て」が多い。

例14　あとで、この人は、ぼ、帽子を取ったら、サルも、が、取りました。（F 7）

例15　あとで、男の人とわかりません。「どうしよう。」帽子を取って、サルも帽子を取ります。（F 4）

例16　それからおじいさんが、帽子を落として、サル、は、この活動もまねて、おじいさんが、すべての帽子を、取りなおせ、なおせました。（F 2）

あることをしたら、別のあることが起きたという継起的な関係は、「～て」ではうまく表現できていない。例14の「～たら」は、接続形式としては適切。

⑤［Ⅴ．b］と［Ⅵ．a］の間：時の経過、順次性などを表す「あとで」「それから」などが使われている。この傾向は絵と絵の間ということで　に共通するものか。

例17　サル、サルは、サルは、同じ、同じ、同じ、サルは、まに、まね、老人に、まね、まねました。それから、老人は、帽子を、帽子を、すて、すてます、すてて、サルは、ぜんぶ、ぜんぶ、帽子も、す、すて、すてました。（Ｆ８）

このような日本語学習者の発話にみられる、母語話者とは違う接続形式の使用傾向は、表現したいことがらを自分の使える範囲の言葉で言い表そうとする試みの現れである場合が多い。その多くは文法上、または文脈上不適切な非文をまねいてしまっているが、その反面、彼らの発話を単なる単文の羅列から文章に近づける効果も持っている。

ある言語の非母語話者が、自分にとって難しい単語や構文などを避けるために、その代理となる単語や表現を用いる方法はparaphraseと呼ばれ、E.Tarone他1976の中ではavoidance(回避）のストラテジーのうちのひとつとされている。このストラテジーは、うまく使えればある段階までに学んだ単語や文法や表現で、より多様な状況に応じた発話ができるようになるわけであるから、日本語を教える教師側も、これを有効に活用する方法を考えてやるべきではないだろうか。

５．今後の課題

今回、分析対象としたストーリーテリングの資料は、話の流れが非常に固定されていたために、複数の被験者に共通した接続形式の使用傾向をつかむのには便利だったが、与えられたストーリーの言語化という作業は、日常のコミュニケーションとはかなり離れた言語活動であり、そこでの発話は自然な発話とは言いがたい。

そこで今後は、発話の目的がはっきりしており、しかも発話者が自分自身で文章を構成して話す必要があるような場面における発話（例えば「理由を説明する」「誰かを説得する」等）の中でのコトとコトの結びつきを資料とした分析を行い、そこからコトの接続に関する教育方法を考えなおしてみたい。

［参考文献］

1　寺村秀夫1982『日本語のシンタクスと意味　』くろしお出版

2　豊田豊子1979「発見の『と』」『日本語教育』36号

3　森田良行1987「文の接続と接続語」『日本語学』６－９

4　南不二男1974『現代日本語の構造』大修館書店

5　畠　弘巳1985「接続詞と文章の展開」『日本語教育』56号

6 Elaine Tarone,Andrew D.Cohen and Guy Dumas 1976 'A closer look at some inter-language terminology'

7 Hans W.Dechert 1983 'How a story is done in a s econd language'

(6, 7は "Strategies in Interlanguage Communicatio n" 1983,Longman 所収)